

今年度最後の聖日を迎えました。今年度の歩みを振り返り、次年度に思いを向ける時です。今日与えられた聖書の言葉は、ある出来事と出来事の間で、聖霊なる神様が教会の目をどこに向けさせてくださっていたかを証ししています。

前回お読みした使徒行伝13章の始まりから教会は新たな段階に入りました。海外に向かって広く出て行くこととなった、通称パウロの伝道旅行と呼ばれている旅の始まりでした。今日は、最初に訪れた町を旅立った後の出来事です。

パウロとその一行は、最初に辿り着いた島から船出して、また陸地に上がって行きました。ここで、これまで旅を共にしてきた助手のヨハネが身を引いて、エルサレムに帰ってしまいました。パウロとバルナバは恐らく引き留めたでしょうが、その言葉は届きませんでした。

しかしふたりはさらに進んで、次の町アンテオケへ向かいました。彼らを送り出したアンテオケ教会と同じ地名ですが、全く別の場所です。

このアンテオケにもユダヤ人達がいて、エルサレムから離れていても、安息日には会堂に集まり礼拝をしていました。パウロとバルナバも、会堂に入って席に着きます。礼拝が始まり聖書が朗読されると、その会堂を司っていた人達が、パウロとバルナバに奨励の言葉を語ってくれないかと申し出ました。

聖書が朗読された後に語られる奨励の言葉、それは二千年余りの間、世界中の教会で、日曜日の礼拝毎に行われ続けてきた説教のことです。ここで記される「奨励」は「パラクレートス」という言葉で、「助け主、慰め主である聖霊」を指す言葉でもあります。説教は、傍らにやってきて慰め、助け、語りかけてくださるイエス様の言葉です。

この時パウロが語り出した奨励の言葉は「人間が何をすべきか」ではなくて、「神があなたのために何をしてくださったか」ということに尽きます。

パウロは、聖書に基づいて出エジプトの物語から語り出しました。かつて、エジプトで奴隷だった彼らの先祖を脱出させたのは、モーセという人物でした。しかしパウロは、偉大な指導者モーセがイスラエルをエジプトから導き出したとは語らず、「この民イスラエルの神は、彼らをその地から導き出された」（17節）と話しま

した。この後、士師と呼ばれるさばき人たちが現れますが、これについても、偉大な指導者が現れたとは言わずに、神がその人たちをおつかわしになり、イスラエルを救ったと語ります。その後も、人々が王を求めて王国ができましたが、サウロが王国を建設したのではなく、神がサウロを選んで立ててくださったと語ります。それから神はサウロを退け、ダビデを立てて王とされました。そして神は、このダビデの子孫の中から救い主イエスを送ってくださいました。

しかしここで、人々が主語となる文が現れます。人々は、その主イエスを不当な裁判にかけて殺し、墓に葬りました。人々が主語となっていくことは、神の御心を痛め齒向かうものだったのです。

「しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。」（30節）とパウロは続けました。人間の手で無に帰してしまったように思えることも、神はご自身のご計画の中に取り込んで、復活の光の中に置いてくださったと人々に伝えました。

聖霊がパウロに見せ続けていたのは、イエス・キリストにおいて神がしてくださったこと、そして今も神がしてくださっていることでした。そして、その奨励の言葉の中で、パウロが語った洗礼者ヨハネの最期の言葉からも、不条理な死を前にしてなお、人間の小さな働きや出来事にではなく、永遠に繋がる大きな神の御わざに目を向けさせられ続けていた姿が伝わります。

パウロのこの説教を聞いた人たちは、次の安息日にも同じことを話してくれるように頼みました。礼拝説教はいつも、主イエス・キリストを指し示します。神は、独り子を十字架につけてくださるほどに私達を愛してくださっているということ、主イエスが救い主として、いつも私達の傍らにいて助けてくださること、私たちのわざが不完全で終わったとしても、それを受け取って真実に完成させてくださることです。そしてその言葉は、いつでも、何度でも、私達を癒し、励まし、罪を悔い改めさせ、新しく生かし直してくださいませ。

終わりの日に完成させてくださる神様の御わざの中で、それぞれに委ねられた働きを受け取って、安心して新年度を迎えていきましょう。